

慈照寺銀閣の修復を顧みる

総括部長 中尾 正治

1. 慈照寺銀閣の修復を顧みる

慈照寺銀閣の保存修理は平成22年12月に終えて、既に6年を経過した。修理を振り返ってみるとその後の経過や報告に気掛かりなことが多く、後悔や反省するところがあり、今に及んで修理や調査の内容について、新たに思いを巡らし後述のようなことを不躑躅ながら綴ることとした。

慈照寺は、東山連山の北辺、如意ヶ嶽周辺の間々の一つに月待山が在り、それを背景に静寂に佇んでいる。臨済宗相国寺派に所属する禅寺であり、東山と号する。室町時代中頃、幕府8代将軍・足利義政が、自己の隠棲の別業として造営した山莊東山殿が、義政の死後に慈照寺となり、古都京都を代表する銀閣寺という別名で通称され、世界的に有名である。

義政の祖父が建造した鹿苑寺の金閣が金箔に覆われた煌びやかで壮麗な印象なのに対して、銀閣はしゃれた造りと枯淡で落ち着いた雰囲気により、侘び・さびの表現された建物として広く知られている。

慈照寺は延徳2年（1490）に開創され、以後約530年の歴史の経過において、はっきりと分かるだけで、江戸時代の寛永年間と大正期に境内全域にかかる改修が実施されたことその他、銀閣などの建造物は、2、30年の繰り返して屋根の葺き替えを行いながら今日まで創建の面影を留めている。

銀閣のこの度の修理は、私が京都府教育委員会文化財保護課に文化財建造物の修復技術者として在職した最後の担当業務となった。銀閣のこの頃は、屋根の柿葺の葺き替え時期を向かえていた。ところが、葺き替えに当たって事前調査を行ったところ、屋根以外にも予想以上に傷みが激しい事が分かった。ことのほか耐震性となると全く剛性不能だと判断され、全体に及ぶ建築構造の補強が急がれることになった。

このようなことから、平成19年末から銀閣全体を素屋根（建屋）で覆って約2年間に及ぶ保存修理（修復）工事を実施することになった。

この工事は、単なる修復だけではない。修復の対象は国宝建造物、並びに特別名勝庭園指定内に建てられているので、建物の形状や庭園景観を最小限であっても損なうことは許されない中での工事を行うこととなり、工事の進行は容易でなくなった。耐震性の不足から、基礎部分に補強用のコンクリートを目立たないように入れる計画であったが、庭園保

全ということでは地盤の掘削は思い通りにならなかったもので、寺の理解を求め、さらに私が所属する教育委員会にも幾度か掛け合う場面が続いた。

このような状況で建物の解体工事を進める中、部材の組み合わせが不合理な箇所、また仕口・継手が遊離して組まれていない状態、柱にはかって使用された柄穴が見出されるなど、修理を重ねてきた経過が看取れ、建物内構造、間取り、間仕切り装置が大きく造り替えられていた。さらに、2階の外装が今とは似ても似つかない仕上がりであったことも分かった。2階の壁面など内外表装面の全体に黒漆が塗られていたほか、軒廻り及び組物とその周辺には条帯紋、亀甲紋といった紋様が描かれ、朱や緑青、群青などの顔料で鮮やかに極彩色紋様が施されていた。外装の漆塗面の上には白土と明礬^{みょうばん}が塗られた時期があったことも分かった。分析を依頼した研究所などで再現してみると、漆の上に白土、明礬を重ねることで、銀箔を貼ったような光沢を現し鮮やかな風合いになった。江戸時代の元文～寛政年間（1736～1801）の絵図には銀閣を「白角」と記されてあったことから、その頃の銀閣2階は白く輝いていたのかもしれない。

白い光沢で輝く外壁と鮮やかな軒廻りの極彩色。これは枯淡美を伝える現在の銀閣の外観とは対照的な姿が嘗て存在した。

銀閣外観が白く輝き、軒は色彩豊かな姿であっただけではない。今回の改修の過程で2階外部の北面に柄穴を発見した。それは2階に廊下を取り付いた痕跡であって、これは直接に2階へ昇る渡廊下附の階段が設置されていた可能性が高まった。想像の域を出ないが、義政にとって観音殿（銀閣）の1階は書院として客人のもてなしの場であり、2階は本尊観音像を安置した仏殿とする聖なる空間であった。そのために出入口を別個にしたものと想われた。

大徳寺や東福寺の三門をはじめとして長年、京都府内の寺社の改修や保存に勤めてきた私にとって、公務員生活の最後にこのような想定できない仕事が待ち受けていたとは思ってもみないことであった。

私は、修復に当たって常に心掛けてきたことがある。古人の建造に対する思いに心を通わせ、古人の視点から建造物を見ることの大切さ。それは銀閣の修復でも同じである。

慈照寺の主である義政は、文安6年（1449）に將軍職についた。しかしその頃は政争や農民一揆によって幕府の信頼は大きく揺らいでおり、さらに將軍就任後に勃発した応仁の乱がそれに追い打ちをかけた。幕政に嫌気をさした義政は將軍職を息子の義尚に譲り、自らは東山に隠棲した。

こういったことから義政は政権を投げ出した無能な將軍という見方がありますが、私は修復する過程で伝わり知り得たことに、義政が観音殿を建造する意義と、建築に対する拘

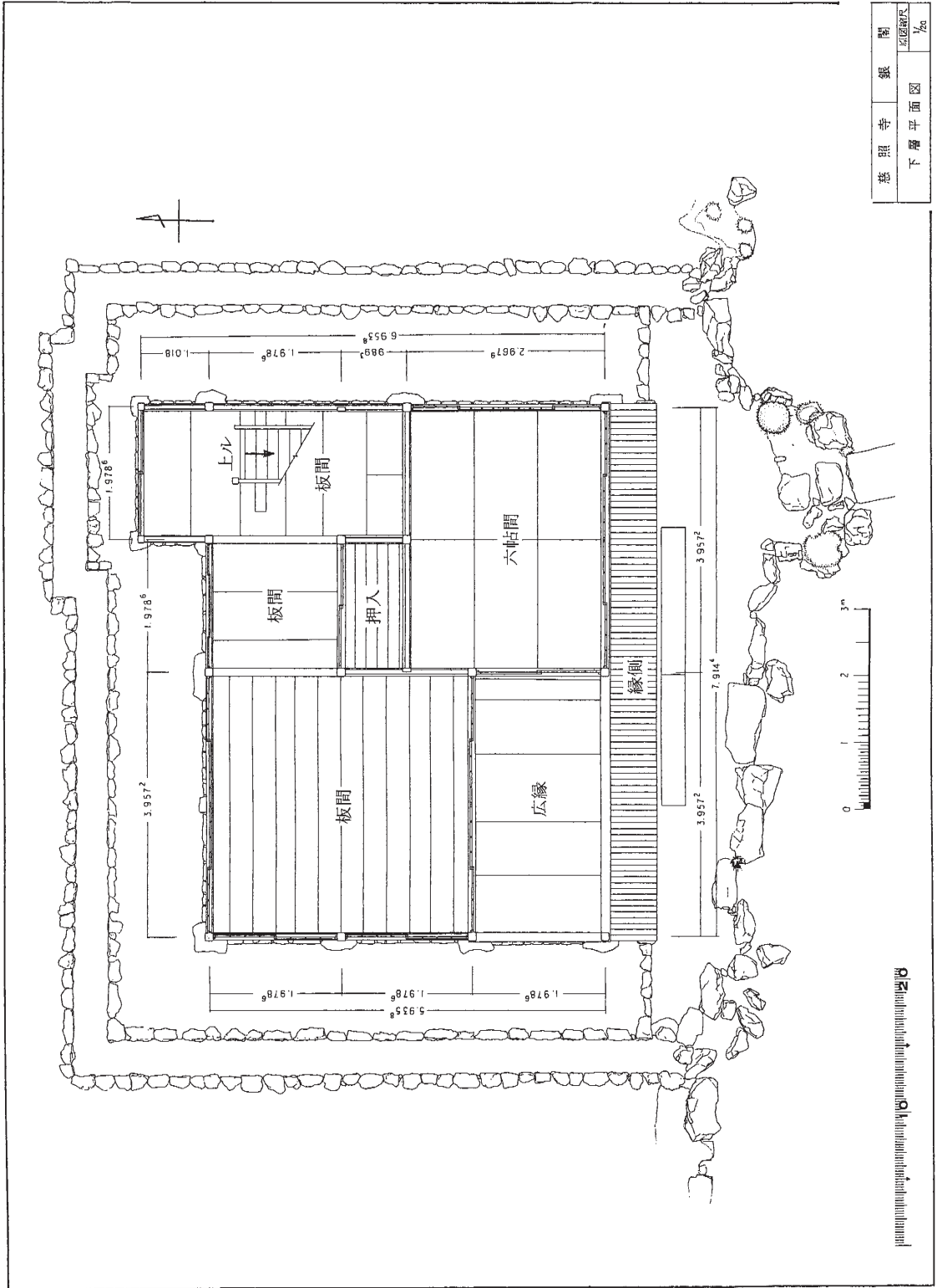
りが存在していたことが分かり、義政の本質は言われているようなことではないと思うようになった。幕府の権勢が衰退の一途を辿る道で、それを回復させるのは義政ならずとも極めて厳しい状況であり、幕政に限界を感じた義政は、政治とは全く別の方法で世の混乱を立て直したいとあるいは考えていたかもしれない。それが東山文化になっていく。義政は月をこよなく愛好したとしてよく知られている。闇夜を仄かに照らす月を自らの思慕に重ね合わせたのだらうと推察された。

実際、義政は書画や芸能に秀でた者は身分を問わずに受け入れ、東山山荘を本拠として茶の湯や能楽、生け花、水墨画などが発芽した。この東山山荘での出来事が日本文化の礎となっていった。その意味から義政は文化史に名を留める多大な貢献者と言ってよい。

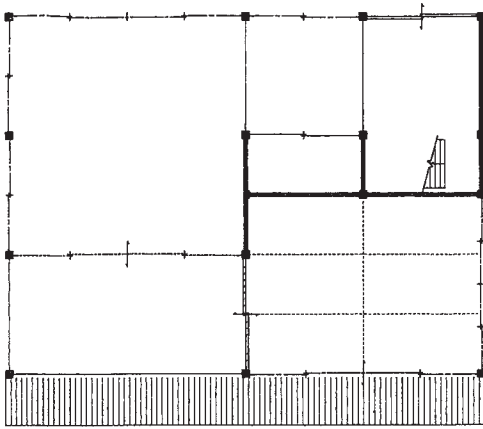
義政の生き方は現代人にも人生の示唆を与えてくれているように思う。私生活や仕事で様々な障壁にぶつかり、困難に晒されている時、なんとなく視点を変えて世間を見つめたら自分の得分とする事や得意分野を伸ばせる環境が見つかるかも知れない。ということも少なくない。そのように考えながら建物の修復に当たっていると、義政という人物をより身近に感じるようになった。

役所を退職したいまも私は、縁あって文化財建造物の修復作業に当たる毎日。余り長くないがこれからも一つ一つの仕事に真心を込め、そこに秘められた古人の思いを探していきたいと思う。

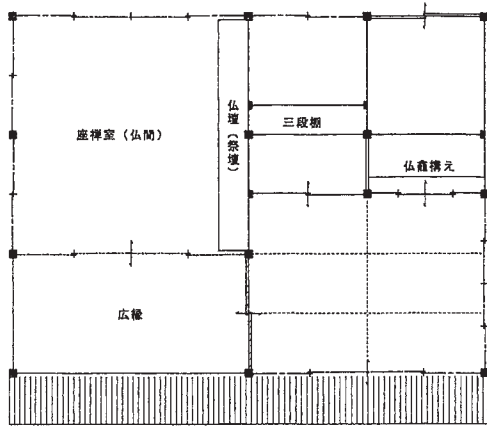
この度の銀閣の保存修理に関して、平成22年末に調査と修理工事の全容を詳述した「国宝慈照寺銀閣修理工事報告書」を京都府教育委員会から刊行している。また、文化財保護啓発の意味を兼ねて銀閣の2階軒廻りなどの極彩色紋様を復原した模型を寺境内の一郭に展示している。



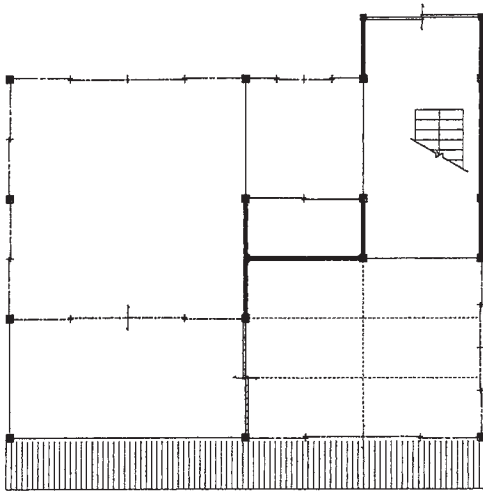
9



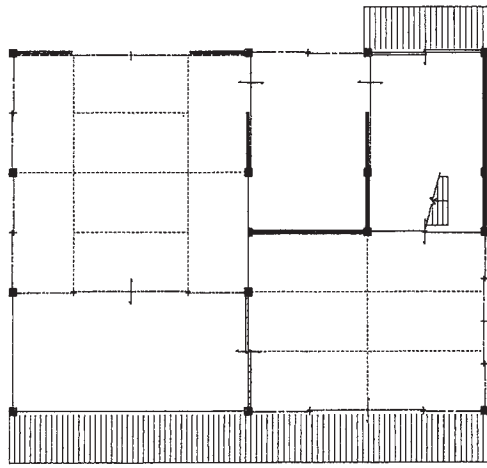
③元文期（元文3年の修理願付図）



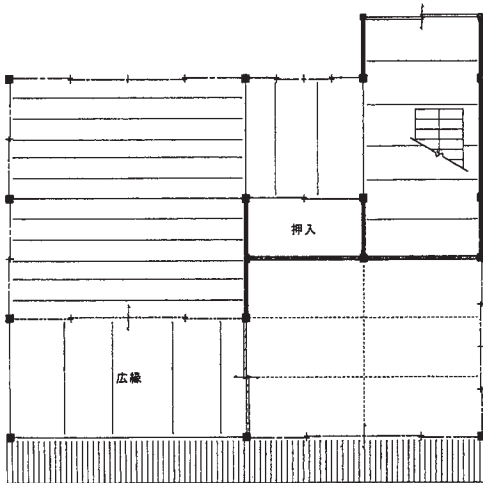
①当初



④天明－嘉永（嘉永4年の寺蔵古図）











②江戸初期（寛永16年『東西歴覧記』
収載平面図から）



⑤現状

括弧内は参考とした史料を示す

- 腰高明障子（中敷居無し） 
- 腰高明障子（中敷居有り） 
- 襖 
- 板戸 
- 杉戸 
- 板壁（+貼付壁） 
- 漆喰壁 
- 障壁 

一階平面変遷図

2. 慈照寺銀閣の本来の名称

観音殿から銀閣への名称の変化について

建造当初は「観音殿潮音閣」と名付けられていたが、後になって一般に「銀閣」として知られるようになった。慈照寺の名称も銀閣寺と通称されるようになり、その所在する所も現在では銀閣寺町という地域名まで付いている。

ところで、観音殿が「銀閣」へと呼称が変わっていくことになったのか、また、併せて銀閣に銀箔が実際に貼られたのであったかどうかについて、調査と古書などの記述から探ってみようと思う。

銀閣の名を正確に表現しようとする、それは観音殿と言うことになり、またそれは1階の心空殿、2階の潮音閣と名付けられた2階建ての建造物の総称と言うことになる。

銀閣という呼び名の初見として今のところ知られているのは、江戸時代の京名所案内書の一つで、万治元年（1658）作成の「洛陽名所集」で、そこには「此寺は。浄土寺村の東のかた也 義政將軍 東山殿号慈照院延徳二年正月七日崩 御菩提所也院の假庭に閣有。銀薄にて彩しければ。銀閣寺とも云なり。北山の金閣に。ことならふとぞ」と書かれている。この案内書以降の他書は「銀閣寺」と称して案内していることから、江戸時代の初め頃から金閣に対比するようにして「観音殿」を「銀閣」と通称しはじめたように考えられる。また、「洛陽名所集」にはその文面に「銀薄にて彩しければ」とあるのに気付くが、実際のところ閣に銀箔が貼られていたのだろうか。

正徳元年（1711）作成の「山州名跡志」に「(前略) 先是義満公北山ノ山荘ニ金閣ヲ造ラル。是ニ准 此閣ヲ建ラル。然レドモ未鑲箔義政崩じ玉ヘリ。雖非鉞其趣向ニ依テ呼銀閣也。然ルヲ實ニ銀鉞アリト思フハ非ナリ。見者十百皆是ヲ見顯シテ不審ヲナサズト云フ。古跡ヲ見ルニ不堪辨何ノ意味アラシヤ」とあり、この文面では、「箔を貼らずして義政は死亡した。実は銀箔は貼られていない。見る者皆、不審ではないと云っている」と表現している。この案内書では、銀閣は義政の造立から銀箔貼りはなかったと解釈できるので、先の「洛陽名所集」の記すところと表現は異なる。

修理前の調査及び修理中に実施した銀閣2階の外壁面塗装材調査によれば、塗料片の分析からは銀の金属反応は極微量であり、箔片の存在は考え難いというものであった。これは遺構からみた場合、銀箔を貼った痕跡はなかったことになる。観音殿上棟後の僅かして義政は身罷っている、金閣の金箔貼りに対して義政は観音殿に銀箔を貼る計画であったとしても、それは完成されなかったのではないかと推測できた。

観音殿を銀閣と呼ぶ名の由来は、江戸期名所案内書などの表現から分かるように金閣に対比した呼称であり、そのうえで銀箔の有無を論じている。現今においても銀箔の所在に

ついで知識を傾けられるところもあるが、何れにしても観音殿が銀箔で覆われる計画であったという前提に立脚した憶測に過ぎないと思う。

3. 慈照寺銀閣の建造当初の表情は、枯淡な雰囲気とは全く異なっていた

黒漆塗りで覆われ、建築彩色が施された観音殿

観音殿の2階外壁面は銀箔で覆われることはなかった。ところが、黒漆塗りを2階内外のほぼ全面に施していたことが分かった。この漆塗りの下地仕事の痕跡が部材に多く残されており、密度の高い良質な施工が見て取れ、高度な漆塗り仕上がりであったことが窺えた。当時、漆塗りは厨子・仏壇・仏像等の工芸作品によく使用される仕上げ方で、建造物の外装面を覆うということではなかった。漆塗面は外気に晒されると早期に白蟻化及び剥離劣化するなど耐候性に乏しいためであろう。しかしながら金閣は金箔下地に漆塗りがあったからこそ箔が押すことが出来ているわけで、そのことからいえば、金閣が漆塗りの施工された建造物として先例と言える。実は、銀箔を押す下地にも漆塗りが必要なので、観音殿の漆塗りはその下地であったとも想定したこともあった。(工芸品的で小建築物ながら、中尊寺金色堂は金貼り仕上げの先例する遺構がある)

観音殿にはまた、漆塗面の上面に彩色顔料にて紋様を描き留めていた痕跡が検出され、金属箔押しとはまた趣を異とした表現がなされていたことが分かった。このことは先述したとおりである。

観音殿に描かれた彩色紋様は、仏堂内陣や厨子の上部、大画面では三門の上層閣内に描かれた紋様に類似する。金閣の二層内部の一部に極彩色を留めている箇所が見出されていることは既に知られている。將軍足利義持が造立に関与し、上層を「妙雲閣^{みょううんかく}」と名付けた東福寺三門にはその上層内部の全面に極彩色画が描かれている。このような御堂内部に全面に亘って仏画や花紋など極彩色で描くことは、醍醐寺五重塔初層内部や浄瑠璃寺三重塔初層内部など平安時代からの装飾表現とみられ、内陣柱、来迎壁や天井などの部分彩色装飾は平安期初期までに行われていたようである。こういった彩色の建築への表現を建築彩色と称している。

建築彩色は、平安期の社殿建築に既にその外装に採用されていて、仏教建築は室内空間に限られていた。慈照寺観音殿は、2階の外装に建築彩色が施されていたことが分かったが、描かれた時期については観音殿造立の頃か、または江戸時代初期の慈照寺再建の頃ではないかと考えている。観音殿2階内外部の漆塗装の精査から、造立期と大正2年の二度の改修による補修塗りが認められた。この度の修理調査で検出した建築彩色は漆塗面に直接に描かれていたことと、顔料の剥落状態が著しくて絵柄が殆ど失われていたことなどか

ら判断して、観音殿造立期に描かれていたと想定していた。そうだとすれば、仏堂建築として造立し、その外観の表現に建築彩色を採用した観音殿は、当時として類いのない存在であったと考えられた。

観音殿は、義政の東山殿を構成する重要な造営物の一郭として建てられた。西芳寺の瑠璃殿に模した造形や用途を求めるものであったとされ、彼の生存中には完成を見ることはできなかったことで心残りであっただろうと推察された。しかしながら完成した観音殿は彼の望んでいたとおりの姿形で出来上がったのではないかと思う。

1階は、坐禅の場を配置することから、坐禅の合間に池庭の景観が望めることの出来る座敷を備え、また時には接客に供する装置を造り上げている。2階は、観音菩薩を室内の中央に安置し、その両脇に禅宗様窓を造り、腰掛を設ける空間は信仰上の用途に限定していると言ってよい。この方三間の一室空間は、究極の仏堂で在るかのごとくといった存在感に陥る。特筆すべきは、上層閣にすることにより、天上位置であること、池庭を遠望する効果が得られることである。さらにその極みとして内外装を漆黒で覆ったことであり、同時に極彩色画を描いた観音殿の姿は、庭園の中心に浮かぶように置かれた観音を本尊とする大きな「厨子」のように私は今思う。

参考資料 慈照寺銀閣現況調査報告書